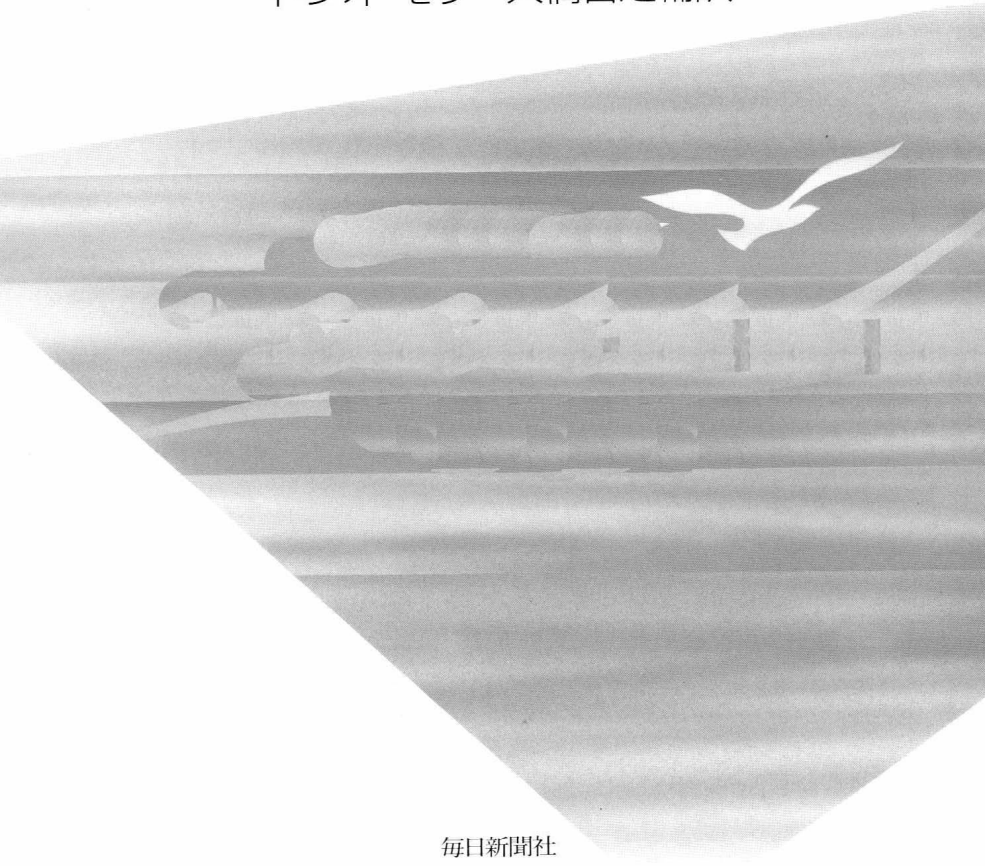
カリフォルニア州ヨコハマ町

トシオ・モリ　大橋吉之輔訳

カリフォルニア州ヨコハマ町

トシオ・モリ　大橋吉之輔訳



毎日新聞社

カリフォルニア州
ヨコハマ町（新装版）

一九七八年一二月一〇日　第一刷発行
一九九二年四月一五日　新装版印刷
一九九二年四月三〇日　新装版発行

著者　トシオ・モリ
訳者　大橋吉之輔
編集人　深瀬正頼
発行人　戸田栄輔
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇-五一　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　図書印刷
製本　大口製本

万一、落丁・乱丁の場合は、小社でおとりかえします

Printed in Japan 1978
ISBN4-620-10454-X

カリフォルニア州出身の新しいアメリカ作家
トシオ・モリ氏の短篇集に寄せる
インフォーマルな序文

何千人といるアメリカの隠れた作家の中で、トシオ・モリほど英語を書くことが下手な人は、三人といないであろう。彼の作品には文法的な誤りが充満しており、その英語は、特に彼が何かすばらしいことを必死に訴えようとするときに、はなはだ良くない。いかなる高校の英語教師でも、彼の文法と句読法には落第点をつけるであろう。

にもかかわらず、トシオ・モリはおそらく現在アメリカにおける最も重要な新作家の一人である。

彼は生れながらの作家である。生れながらの作家は、その才能を最も発揮するときには、言葉では書かない。生れながらの作家ではない作家は、反対に、言葉で書く。他に仕方がないのである。生れながらの作家は、聞くに価するようなことを言わずにはいられない。その他の作家は、聞くに価するようなことを言うためには、必死の努力を傾けなければならないのである。

トシオ・モリが自分をもっと研いて、より明晰になろうと努めることは、いいことかもしれな

い。しかし彼はすでに、他の作家たちが何年もかかって手に入れようと努力し、ときにはけっきょく手に入れることのできないものを、持っている。それは、彼の眼である。彼は見えるのだ。物を通して真実を見、人間を通して、愚者を偉大で厳粛なヒーローに変える不可思議で喜劇的で憂鬱な真理を、見ることができるのである。眼と同時に、彼は心も持っている。真の作家のすばらしい心である。理解、同情、寛容、温情、そういったものを彼はすべて持っている。

彼はカリフォルニア州のどこかで生れた若い日本人で、最初のすぐれた日系アメリカ人作家である。彼はカリフォルニア州に移住してきた日本人たちのことを書いている。他の誰かが彼等のことを書こうとしても、私達には彼等が理解できないであろう。また、モリの眼と心とを持っていない他の若い日系作家が彼等のことを書いたとしても、モリの作品に出てくる人々とは違っているであろう。同じく日本人ではあっても、モリの作品の中では、その前に先ず生きた男であり女なのである。

私はトシオ・モリをアメリカの重要な作家であると考えている。たとえ彼の作品がニューヨークの出版社から出版されていなくとも、彼が重要な作家であることに変りはない。また、彼の作品がニューヨークの出版社から出版される日もそう遠くはないと信じている。

作家はけっして発見されるものではない。彼等は孤独の中で何年も懸命に書き続ける。その孤独を人々はけっして誤解してはならない。そしてついにある日誰かが彼の作品の一つを出版し、彼にとって世界が大きく変りはじめる。その無名の作家は、自分が孤独の中で求め続けてきた世

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

間の認知を得て、自分が経験し自分を養ってくれた孤独を忘れはじめるのである。だが、その孤独がなかったら、彼は認知を得られなかったはずである。長年にわたる労苦がなかったら、彼の誕生がにこやかに承認されるはずもなく、平安も得られなかったはずである。この孤独はすべての人々の孤独と同じものであり、それは個人的なものではない。それはすべての人間の、最も厳粛であると同時に最も喜劇的な部分なのである。この孤独と認知の交替劇が起りはじめる時が、作家にとっては、うれしくはあっても苦しく難かしい時なのである。

私はこの若い作家トシオ・モリの発見者だとは思われたくない。彼がカリフォルニア州の日本人の中から作家として登場したことを、私は心からうれしく思ってはいるが、彼の作品に対する短い序文をここに記すことに、多少の困惑を感じていることも事実である。彼が私のこの行為をどんなに心から感謝するかを知っているからである。しかし、彼にとって最悪の事態はまだこれから起るのである。二つのことが考えられる。一つは、彼が大きな成功を収めて、自分自身と世間と創作活動のあいだで葛藤を起し、ありとあらゆる種類の新しいトラブルに直面することである。他の一つは、彼が作家として一応の認知は得たものの成功はせず、他の種類のさまざまなトラブルに逢着することである。だがどちらの場合でも、私は彼が書き続けて行くだろうことを知っている。成功すれば、彼はこれでほんとうにいいのかと自分の作品に疑問を抱くだろうし、失敗すれば、他の理由でやはり自分の作品に疑問を持ち、他の苦労をするであろう。その両方が起ることはあり得ないし、どちらにころんでも、苦労やトラブルは付いてくる。だから、それはあまり

問題ではない。モリの最初の物語は、サンフランシスコの文芸同人誌「ザ・コースト」に発表された。有能な編集者でもあるクリストファー・ランド（訳注・一九一二年生れの作家、編集者、随筆家。）が、その物語を発掘し、気に入り、編集するのを手伝ったと信じている。それは「兄と弟」という題のもので、本書の中に収められている。

誰も作家に、彼の作品をよりよくするためにこうしろと言うことは出来ない。私に出来ることと言えば、トシオ・モリが自分を研いてもっと明晰になるよう心がけると同時に、彼だけが持っているものを何一ついつまでも失わないように祈ることだけである。ともあれ、本書の中の彼の物語は、若く、新鮮で、純粋で、地味で、喜劇にあふれている。

（注）右の序文は六、七年前にサンフランシスコで書いたものである。延期されていたトシオ・モリの最初の本が、ついにここに、変ることのない新鮮さをたたえて出版されることになった。読者諸君に、すばらしい読書体験をお約束する。

ニューヨーク　一九四八年十月

ウィリヤム・サロイアン

目次

序（ウィリヤム・サロイアン） 1
1 子供たちよ 13
2 すばらしいドーナッを作る女 23
3 七丁目の哲学者 28
4 ママの怒り 36
5 テルオ（あるいは、トシオ・モリ） 44
6 終点 51

7 花を召しませ 62
8 アキラ・ヤノ 76
9 リトル・ヨコハマ 84
10 サトル・ドイの株式操作 91
11 三人の日本の母 99
12 アメリカ娘ナンバーワン 107
13 はぐれ駒 115
14 ノダ家の人たち 129
15 世界中の卵 139
16 笑う男 147

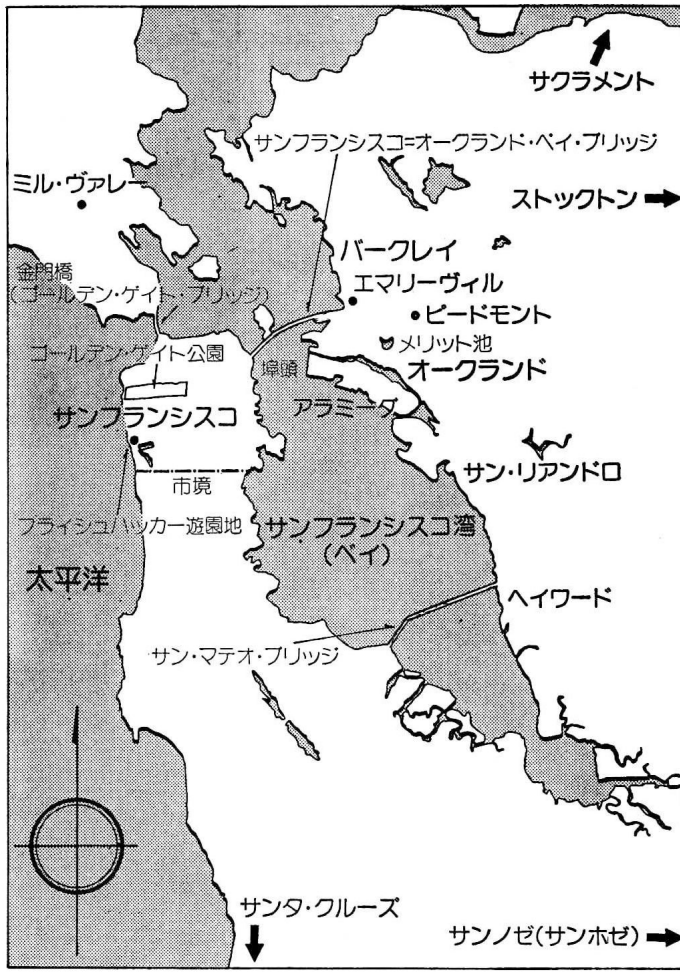
17 日本人の顔を持ったアメリカ人 154
18 木 165
19 ポンポンダリア 170
20 十一歳のビジネスマン 180
21 兄と弟 189
22 明日と今日と 197
訳者あとがき 203

装幀　倉橋三郎

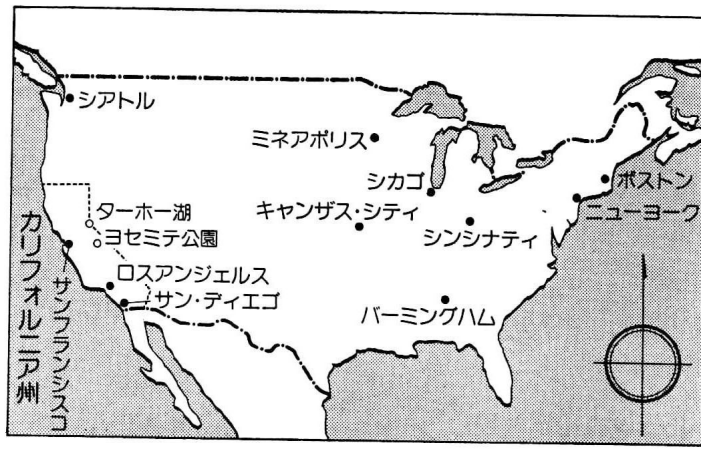
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

カリフォルニア州ヨコハマ町

亡き母ヨシ・タカキ・モリに捧ぐ



サンフランシスコ周辺図


シアトル
ミネアポリス
シカゴ
ボストン
ニューヨーク
キャンザス・シティ
シンシナティ
ターホー湖
ヨセミテ公園
カリフォルニア州
ロスアンジェルス
サン・ディエゴ
サンフランシスコ
バーミングハム

アメリカ概略図

1　子供たちよ

子供たちよ、昔わたしは日本という国に住んでいました。おまえたちのお祖父さんは、そのころもうこのカリフォルニアにきていて、わたしの渡航費を稼いでいました。日本からほとんど外に出たことのない村人たちは、渡航費が届き次第、わたしがお祖父さんのところにくるつもりであるということを聞いて、たいへん驚きました。

「アメリカ！」みんなは叫びました。「アメリカちゅうたら、世界の裏側にある国じゃろうが。あんた、異人の国に行くちゅうのか。異人の言葉が読めも書けもせんくせに、行って何するつもりじゃ？」わたしはにっこり笑っていました。そして、お祖父さんが書いて寄こしたサンフランシスコの街のことを、あれこれ夢の中で思い描いていました。サンフランシスコ――変ったおいしい食べ物がどっさりある街、金貨の街、見たことも聞いたこともない人や音楽があふれている街、大きな建物や船の街。

ある日ついに、渡航費を同封したお祖父さんの手紙がきました。「すぐにこい。ぐずぐずするな」お祖父さんはそう書いていました。近所の村人たちがどっとわたしの家に押しかけてきまし

た。「行くな！　わしらと一緒におれ」みんなは興奮して叫びました。「アメリカと日本の間には戦争が起りそうなんじゃ。あんた、太平洋の真中で捉まえられるぞ。アメリカに渡ることはできゃせんぞ」しかし、わたしの心は決っていました。みんなは、外国での移民の生活がどんなに淋しいものか、わたしにいろいろ説明して聞かせようとしました。そして、わたしの肩に顔を寄せて泣き、わたしの体を抱きしめました。「うちはもう切符も買うたし、荷造りもすんどる。うちは行くんじゃ」わたしはそう言いました。

それからの約一月は、昼も夜も、村人たちの家に招かれて、送別のご馳走ぜめでした。予定を変えて出発を延期しなければ悪いような気さえしました。出発のとき、みんなは駅まで見送りにきてくれました。そして、悲しそうな目をしながら、手だけは元気に振ってくれました。しかし、わたしの気持は沈んではいませんでした。わたしはお祖父さんやサンフランシスコのことを考えながら、未来を見ていたのです。

弟が神戸までついてきてくれ、船が桟橋を離れるころになって、はじめてわたしは心が痛むのを感じました。そう、わたしは泣きました。最初の夜は、とても眠ることができませんでした。「すぐに帰ってこいよ。みんな待っちょるからな。わしらがいつもついとることを忘れるな……達者でやるんじゃぞ」そう叫んでくれた友人や知人の声が、耳について離れなかったのです。船が大きく揺れはじめ、デッキにあがることもできなくなりました。すぐに船酔いにかかりました。どんな船だったかって？　そりゃちっぽけな船でした。でも、その当時としては大きな船だと思

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com